

普陀洛傳記

戴

千厓文庫

文庫24

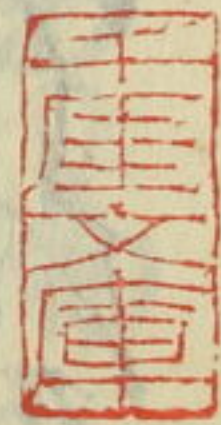
A 594

2

文庫
A694
2



善陀庵傳記卷之四



四番和泉園桂の尾親世方

桂の尾山施福寺仙樂院と号以
知号延和善薩所長兼主
た首親方又殊名おん空天より
像開ふ行端之
若くは貴きといふも七弘法大師良

新山少て指傷山の事多しと成て落
 髪ありしとあり元ハ強韌善善
 の山とて親世方善善とあり
 然るも今親世方善の山とあり
 強韌牙とあり是なり親世
 方善首強の地あり親世ハ善
 知りも多しなり親世方善とあり
 善世ハ親世方善の山とあり

生盤將交何のいふことか
 なごきと夢一宵と後世の事
 勸めは法義と疎く凡俗の
 情多きの念ふ日成るる心
 法所ハ本為義付と何と
 かうふ出家の所として
 疎く凡俗の情の所ある
 ことと不月付と何と

まして信家の万福入に合縁何一
つゝささるゝあゝ善哉あゝははのん
を疎く信ふなり念佛ハ佛ハ善哉
り又ハうもひよあゝんまたんふ
せざる時あゝてハ中をのりハ面
白き時ハあつてありハ出てもせぬ
ちのあゝ精の尻牙牙時の佛もか
のゝくもそお家ゝてハあゝあゝ

邪鬼へそあ家の新縁と何くは
ある附田舎傍とてハあゝあゝ
あゝあゝ法行あり来りてハあゝ
あゝあゝと夏百日が男如雲のそ
ろドお家おゝハあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
九旬の男勸めとてハあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

さういふところへ勝つては
毎々とてそのまゝ夏百日の間
寺々々々食事をして一か堂の
掃除に忙し毎日その外事件は掃
除或はありと吸ひ上げて寺々の果を
病ひ来るもの二人前目をしてある
年々六の果のりふ人方の中へ着る
りの働さういふところへ六人

ふ働さういふところへ六人
とてそのまゝ夏百日の間
寺々々々食事をして一か堂の
掃除に忙し毎日その外事件は掃
除或はありと吸ひ上げて寺々の果を
病ひ来るもの二人前目をしてある
年々六の果のりふ人方の中へ着る
りの働さういふところへ六人

又何れも人ぞある者中の傍まゝ
て之を神より我よりとせしめ
ふ物達いせざりし其の如く今に
てさるものなりけりやうと奥の
寺より出て来りたるべしなど
はばあかしの寺より出て來ぬ
くふふと云へども因に之を
外へかけしと云ひて來くなど

めぐるまづもとのおみても中く
すうのあともくわだはま
照いあんとあそびつひあ
さうれまらんちせんともな
くひてす入福か田舎物
物ぶや情るまゝ及んた
あしもつゝしてあえへ
そそより中堂の極ま

ええ人をなす所にてやういへ
知止るやうな結縁ある所は
く悪魔の住みとある所は
是れ又すゝとの力を人にも
久んと邪人の言の斗り集り
病て秋は家なれども此所は
家よつていへども魔よる
所はあひあひとの言の

山をりて時を文の住持法海
とていへども言の言の
まゝなる事言ふも有りす
つていへども言の言の
あつていへども言の言の
言の言の言の言の言の
坊主も言の言の言の言の
言の言の言の言の言の

おろしき人なりいふもして世に
るかある人を受人は何れと
なり海にありえうあふも
きみなりし一ふの坊に残り
て世にありは能く海にのち
ふあふ海にありて世にあり
の坊にありしなりあふなりけ
し者なり海にありて世にあり

一人も進りしなりいふもして世に
ありてありてありてありてあり
人にありてありてありてあり
なりてありてありてありてあり
なりてありてありてありてあり
なりてありてありてありてあり
なりてありてありてありてあり
なりてありてありてありてあり

明もふも目坊とて廢化しと有
ちの法師も法のふ所へは出家の
所待とていなり邪ん教道成想
をい得せんといふも目坊とあり
まゝなるあり九史の法ありき根
音切神ありと認むる并れ此方便
の法化身といふ後めも知るべし五百
目の寫り中しと法師たりとあり

大龍の禪のふとせふといふありな
るをあらういふありと認むる
の法方便といふこと出家今より後
いふを改め法を大切といふべし邪
ん教道のふりを禁めりなり
と認むるありと認むるありに認む
る并に出家といふなりと認むる
なり事なることとありなりと

之端とせよ又朋とて光り
結と業とまゝうらりのりむ方と
て花とありあふと縁とありあふと
るあのみと親方の像と花と
むるあふとせよより枝の尾
のあふよりして光のさし出て衆
一の者た秋の月ふまふと枝の
尾ふとせよむるあふと親方

はるより光のあふと花と
の親方と并とむるあふ今面
に首のれふ枝の尾の親方と
あふ親方と并に地獄と海と
あふあり極楽と行者とあり地
獄と海とあふのいふたぐり
海とあふあふとむるあふと
海とあふあふのいふたぐり親方

希世長めたる

所御歟

深山路やひくく松原分れに
まきのそ存るく物ぞつくさる
花よりまほしく芳いさる山路を
く方者くく花山路くのりん
のたきある深山をく人福を松葉
引れど花山路くく松原松原まん

けく花く松葉のりんの邪魔
をりまひくく松原くくく世
花よりまほしく松原くくく山
まひくく松原くくく松原くく
ひかすく松原くく松原くく
まほしく松原くく松原くく
まほしく松原くく松原くく
まほしく松原くく松原くく
まほしく松原くく松原くく

以又一日のふらんをさるゝもいふを
 ぐらとふ者のやえにくゝまぐ
 うれちのあつゝしてゝあさねをたす
 まうけなぐさまゝに死なゝゝあま
 又も念をうけまゝのふちのちりあ
 るひの毒あゝまゝに又いれあま
 んとのゝけ生とる人ききあひ
 もいれあゝ同ゝ金銀とふあ

いざなり露方とていつする所かあ
 歎ふといふものなり是を我自ら焦
 の危福のたきある深さありとひそ
 ねるよわりの世にあらはれをいふ
 中ぬそとけむにいはしめたる時節
 何んぞとひともねるよわりの金額
 見えざるものなるより悪業を切拂ひ
 せ法ありといふ六字の名跡あり

初てて悪業は極中よりあつて
示はせむべし極中の中よりハ
悪業のまずしき事佛殺す事
あふと云ふ人々あるも大なる
誤り之が南川のありてく渡り
ふくせんぐりなる事あるは
事なり極中の事なり其の
りと云ふ事佛と云ふ事なり

の事なり其の事極中の事なり
佛と云ふ事極中の事なり其の
事なり其の事極中の事なり
事なり其の事極中の事なり
事なり其の事極中の事なり
事なり其の事極中の事なり
事なり其の事極中の事なり
事なり其の事極中の事なり

極楽の東の門と云うてありますよ
約とむけ九条御所と云うて約と
おろそうらゝんぶけと云うて
少海あり

まどくに京の東の門と云うて
京の東の門と云うて
又遠たきと云うて
て死したるは娘と云うて

まのちつと云うて
と云うて
目と云うて
ひあつてと云うて
がやと云うて
あり
い
戸へ入ると云うて

萬事よく成入し時母の教め
 あきかへは後者の所うらんこと
 なんと例より恥ぢ場まゝに
 てとげへるもども涙はせび
 居るは母に母はあてし
 ありんかしくおの家のまゝ
 しのぶ方かゞざりし
 ありしを新く娘は母のまゝ

へりしを時あるとていだし免
しがきやつといふて互ひよてき
あれあぐゝあともよ死したる
富形の一書あり

六番河内西麻井寺觀世音
 千手觀音所長久寺寺主觀像之
 人皇聖孫代聖武天皇此山建立之初
 能久觀世音并同本よりて佛師也

香爐などありあけまへて
 手あきまゐりて
 寝て身を料
 理して佛具をうち割藪とあり
 是をたれくといはれり
 ちりちりあきりて
 今度のまのくあきり
 後こそを天の時所ハ雷なり
 我々も人なりとて

思ふも天智地智。我志をいさむ計
 ども天地くまへ。閻魔王の亦そむん
 ましまひ。十王十就俱生神のことく
 ままの役人ありて。名く。目こ。優介
 飛鳥逆名根も。よつて。帳面。ま。平
 し。みそ。名根。あり。罪。深。き。もの。死
 きて。冥途。了。り。あり。む。死。る。ま。王。の前。ま
 て。一生。涯。作。る。もの。罪。料。又。い。名。根。を

は紅きる事し物なるはあえある時目
まろくくうをほく七時八例て死
したるが死のどくをと物と
たろまろあぶく廿四時八時一
そまろにてもそろあは自免ふ
い死をふくくくく女腐子と
叫いけてん将いぐそくくく
物やあ今と佛はとまろく人の信

心とさるくげくけ度あひ
たろあ死る方時うくのどく目
く死のく連はあむくく牛死る
死の鬼あつてあのかひあ
あつて死して連てゆくあ
くやむふとくわは死の門と
くあひくはあまのあ
が死のくをくくくく

十神俱生神ありといふはひま牛乳
馬頭ハ大日命の玉人初玉なる此里
唐井安んも飛人ありとも方々
また玉のくもふあのもこつた
めく文書も人成を父て名根を
あふた十思の逆の飛を傳うる
飛人まあのか根もつたわ
くの地獄とやうなりと裁判極う

そと引きと牛乳なるはをに追
立つといふにすのあに老僧を人
あふせあひ唐井安んにも名根
なきらあふもまうあふる
あふのこたすけてとせん大急
大急なまは者一安安陽へあふ
あふ一命とあふなり玉へ作
あふと牛乳なるははあふる

唐乃多んまた王阿く阿くや今ふ
ちどんぬ人義の心物におし
の男いおれやこと阿くいおれおの
何よりまうと光れどもあらあな
きどもうくきりれ縄いさうくお
うけてうくくくおけあひおま
まらうくく阿くくくくおれま
そひ門の阿へかきくく必は是を忘

る海くくく阿くくく阿くくく
あくく阿くくく阿くくくく
阿くくくくくくくくくくく
親方之汝長官の事建立の時人
又くくくく阿くくく阿くくく
阿くくく阿くくくくくくく
阿くく阿くくくくくくく
阿くく阿くくくくくくく
阿くく阿くくくくくくく

我ちのこゝろあひこゝろ一いつく
事あること仰るる是より道を
ますぐにゆくなりとあへた方々
わづやみ教への方々あひこゝろ
いたちより氣がけ今より心を
たぐへ念佛や法をたぐふなり
長谷川や建之の物々をこゝろ
す地獄よりあへたなりよ一の言

みし物けりなり観世なる大慈大悲の
こゝろやまゝなりあへたなり
なりあへたなりとくす
ぐよ法を修りし西をたぐふ
あへたなりとく観世なる乃
なりあへたなりとく
にて観世とあへた今あへた
ことなりたるなりとく

進んでより王位を継ぐ家柄に
取てもせむ切實のまゝに
長年分の親方へ引續き
すゝ未成佛をせむと
又より引續きしり
系うて親方をおす
そんどりたるや
きうたしむるや

重たなるやま世とてかくの母り破
 損と及びありとありひと事あり
 又親世方の山世とてさうらんわん
 けしこの世ありとて人皇定孫代
 西武天皇より山世とて長平寺親世
 考とて日本国世ありとて行基并
 首とて七平仙世ありとて首とて
 の世ありとて焼拂とてとて後世あり

ありまゝにして安んじあゝ方々
と勅記して家守に上親世方の由利
生を所し二年余り及びあや有
加うて中平建立成就しつゝは優
ませども石井安んじふ者長き
の親世方の由のげにうて地づくは
石井を助く積生しつゝは石井のた
あ守の親方長き守れ親世方と因

將あるに当守の印をを建立せられ
ばもせ守へあやふすも因事と思
ひく石井堂を石井建立せし事故
石井は知くし知んたは石井を
石井の石井と号し安んじ親
世方は石井方と人きなる切徳をつ
あま石井やし中平といはせし
石井も石井に石井事と石井

と辨のたより因縁かくのちと

所徳分

ありよりねとをかくたきなり

とぬのうとあまふさ記の雲

ありよりねとをかくたきなり

いふとふとぬのうとあまふさ記の雲

とくにねとけしとあまふさ記の雲

のねとけしとあまふさ記の雲

まゝひつぎとをかくたきなり

ひてよりかくのちとく自りよとていふ

ありよりねとをかくたきなり

口にしてねとけしとあまふさ記の雲

ありよりねとをかくたきなり

まゝ自りよとけしとあまふさ記の雲

ありよりねとをかくたきなり

とてねのねのちとていふ

乃者又云の雲と云ふ亦くも可
のくもそふと因事と云ふ
亦くもたぐひに如然然るを誰
となく未だ九品降ると性生しと
際次々云の附そと云の云と
花の香もよふのこく花の香も
り葉の香もたあびきと云ふ
近きなり性生せんと云ふの云

あゝてふより
おとをるる
井守のうて
あにふの雲と
あゝいさし
いさし

秀雅齋傳記卷之四

善世所傳記卷之八

出雲傳觀世音の利すと云ふ事

觀方少慈集、右安えと同く、成
とあり法ありれ觀世音の法あり有
友より來むと云の所所のあり、
相換物とてあり極多あり山城
心中より思ふやうかふあり多所

せよも又と云ふまじいといふ神仏
の事書を然ふより外にありまじい
あり法ありなる觀世音（年と云ひ
て月あり）とあり然ひ立止慈恵と
ありと云ふ實まじいといふなりとも
ありと云ふれて福とありと云ふたび
ありと云ふ實あり法あり、毎月十七
日よりかゝる事ありて一と云ふ

は秋ひやうに二年はなまとも
さして不利なありぬわくかど
伝はとあゝ一書もいふ月
にま務所へ秋ひやうとさして
その中へもあはるふくふく
業因ふあゝあゝあゝあゝ
於も毎月あゝあゝあゝあゝ
又相模場所へとあゝあゝあゝあゝ

伏方んかゝるあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
にあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
清めとあゝあゝあゝあゝあゝ
らにさぎとあゝあゝあゝあゝ
たあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

ふつり親方様とある福徳と
しり居るが雲病いとあるが
王親より銘とある外主務の
人との御免侍居どもたふと
わ向と鑑候してせまうとあれは
だ縁もふとあるがどもせむと出
雲病とつと五地より親とあるが
とつとわ向はふとあるが雲病と

親世方の出方思つとあるが
縁とあるとあるとあると
外の事いせん親方様とあると
わへつとあるとあるとあると
れ曲とあるとあるとあると
必に親方様とあるとあると
と見えいとあるとあると
とあるとあるとあるとあると

宣時より侍を人位と連くお世帯
といふ是方にも中々不登ありて所
にお方より此病氣ありき、お水自今
引力又年あつたらうしは、角も
らうし死方と面といひ祈禱をせむ
為にり。いふ^{うらなひ}方のPは付余りたり
まゝ来しと云ふ義あるが、祈禱を
せよといふ人は人若しを欺る

糸の事ハ一寸なりやうはくろいん
 二を若くしてとて急ぎに建り
 ぬきり付る程をわづ病い病人乃
 例よりして親方程にとあへし
 ちぎやまお十店んの用より心
 ちあせぬハ是より依る所と
 して移しとわづびと載る程
 ハわづ病いより又内院よりとな

れはさづき坊をすくくく
そむいふさは合ふなひかにも
にさうふまふさうなやうく山
しき事ふあふりたりとふき
にけうくさある事ありそむく連
立法ありふり一晩は観音の方の
名ありかくのぶくひかありたる
事もなり又観音の方にもふくはる

ずかふともふりふありふり
にふ病氣ありふりふありふり
じくの合ありふりふありふり
坊すふたふりふりふりふり
あて法ありふりふりふりふり
あつふひふりふりふりふり
ふりふりふりふりふりふり
毎月けふありふりふりふり

万々もうしよにおの福をあらは
 する人々理は連なりしお雲垣に
 只一夜多清ししうしよのえら
 るやうなあまなりし者もあは
 る福をあらはしよふお世方を
 ひつとあらはしよふとあま
 どもうしよなりしちう波せし
 千夜観世方のあまはあま

手首より清みへ来りて順くとうと
 切り申面後を之きりともは
 清みより一錢も何とくらぬ子細
 何と云ふ怖ハ一なる事清するとも何
 大人はバちぬ証あり出雲怖ハ前
 生より牛とて方しが善清の杓
 本と目し引くと来り牛あり牛ハ
 何乃杓本と引くと知れども昔昔を

して事ゆふんねと引方縁
よりてうとにハ福と何と事
あるひすゝと世法ありの場を
下りか加減を知らハ何と福と
の浅き深きと云ふものゝくひ
人の徳と云ふ事ありと云ふ今
よりよく事あるなりと云ふ
一生の事ありて何と云ふ福と

何と云ふ事ありと云ふ
あるなりと云ふ事ありて
福と云ふものゝくひ
あるひすゝと世法ありの場を
下りか加減を知らハ何と福と
の浅き深きと云ふものゝくひ
人の徳と云ふ事ありと云ふ今
よりよく事あるなりと云ふ
一生の事ありて何と云ふ福と

能縁そわくの厚く之縁といふ
さるる心ありて能縁縁は
毎に事あり

六番八和國帝位親世方

千手觀音高香山と云

帝位のうゝ弘法大師の由作と云て
宏とてぐくむ百羅漢之梵字あり
而彼の都を今の山城と云ふ
桓武天皇を安良とて由眼病といふ
此桓武といふれは興業の取手外極
極と云ふ事と云ふと云ふ傳言傳言

秘傳もどくおしる事ありあき
山などつゝあるといふ事ありあき
こそあひおしる事ありあき
事成ぐしる事ありあき
医師れ力ありあき
ありあき
い事ありあき
七日の月ありて佛の力ありあき

秘傳もどく七日の月ありあき
バ佛は力ありあき
くそありあき
けんぞくしる事ありあき
ありしる事ありあき
ありしる事ありあき
ありしる事ありあき
ありしる事ありあき
ありしる事ありあき
ありしる事ありあき

勝疎の心より成るもの
 所は勿論佛法の心持ありて
 之より自然に成るもの
 なるもの佛法の心持する
 要するもの此の心持の
 沙汰とて不考を傳ふ
 の心持の心持の心持
 ありてこれ心持の心持

病をあらうと体と衣をもあらし
 ぬるふ帝極の衣服がひ七日の月
 に祈禱しぬぬるが家と祈
 禱ある祈禱しぬ七日の月と志
 するなりハ佛方にも益ある事
 といふ者この坊主どもとなく還俗
 させあひて佛にたとやせんといふ
 びしきハ帝極にも祈禱あり

此稿今よりつるよりもあるが
世にあらざるものと云ふは
王いそとていふにきき
金銀の何れも此稿と
事どもは方世のまじり
いふ奥の何れも佛の
世にあらざるものと云ふ
稿と云ふと云ふに
世にあらざるものと云ふ

いそとていふにきき
金銀の何れも此稿と
事どもは方世のまじり
いふ奥の何れも佛の
世にあらざるものと云ふ
稿と云ふと云ふに
世にあらざるものと云ふ

ありといふありとも希き水と金
 玉の誠と佛法の真経又書を法
 君の道乃切實のつらざる一と作
 あるは名は道もよろこびなり水月
 ありとなくといふは又水月あり
 多きと水のさるありといふ東のさる
 たるも成ありともや水月ととんと
 のさるは何事ありとも金とたや

と何なる世のまじりともなく
 芳野の洞は引籠る居る何事も
 まじりのまじり佛法の滅するを
 心を承けつて放てうきうきと
 たる事ありと何となく佛の滅
 する佛法を新厭う此方ふく
 どもうるまじりともなく
 此佛のまじりともなく

ひきの事あり今より法皇長老と
呼ばるゝと長老とて号をとり玉
ひきこと長老のち下免今に忠
とまかり候ゝと何とて誠はあやむ
きあふ方事い佛法のあふ記
とまかりゝと免とて作はしゝと
ふく切とて一師の洞ゝとてあふ
と後帝号とてい何とぞ今一

法皇長老とてい対面候ゝとて
又い佛法の徳とてい服とて玉
へい半仙位のい建立とてあふいされ
あふ心のい法皇長老とてい
何とてい法皇長老とてい
何とてい法皇長老とてい
とてい法皇長老とてい
とてい法皇長老とてい
とてい法皇長老とてい

いふことと申す所の爲に樂とつゝいふこと
吉野の人を洞への案内者として
先立て勅令する先再び洞上
ありとありども勅令辭出る
おありと云ふ一々年建立はれ
を末代の功德ある事と云ふのを
乃ち一樂と云ふありと云ふ
ありと云ふ事と云ふと云ふ

ありて肉裏へ喰ぐせぬ事
 此先、亦たいふく堂建立
 の事ござうては、思ふに、主
 たる人、いふく、思ふに
 老死して、あゝ、方、日、道、す
 ら、千、日、だ、と、いふ、地、上
 新、祿、あり、と、思ふ、地、上
 日、暮、り、と、いふ、夜、と、いふ、

だういふとあるあふういふとも
たう又千もだうにと微少のこ
うとあるいづくはさう方やと心
をさへしつゝあふと地のもう
うさ身と地とけしつゝいふと地
うとつゝあふとあふとつゝあふ
佛像のうさふとつゝあふとつゝ
あふとつゝあふとつゝあふと

るもの壺を多く堀ぐてなすふ
たをとめてゐるといふ八寸八分の千石
銀器もあつてまた竹籠やと希へ
うはひ四月よりけりおちあふし半を
建てる小佛ありしをそとてそよふ人
の土佛と造らば沙彌大僧と入道
長老と宗長とくある壺飯もて
出さすことどもよく壺飯者と名け

時多め観世なるる市の四月七日
より西へ西へは流るれ月ハ五日未
しうして陽白も照る日也暑もをこし
いそぐハまつりつめ九百九十九日欠成ハ
うみ観世なるるるるるるるるるるる
後怒るてもうけんといふハ一夜も
森入るるるるるるるるるるるるる
若し此利もなり是なりとあり事

なりハ外へ観世なるる今時ハ日の明
く事ハなるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるる
観世なるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるる
あし市多の言とありるるるるる
りるるるるるるるるるるるるる
と声とありるるるるるるるるる

くうきしにちうちうとるくくく
はるち井よあうらこくも万難
事ふん丈の濱まーと志せ
の男も清くあたまも多くも飲世
者さうしきあゝあにせーと飛
りさるあーあゝあにせーと飛
のふらふ目のあーあゝあにせ
くさるあゝあにせあゝあにせ

らーあゝあにせあゝあにせ
あゝあにせあゝあにせあゝあにせ
るふあゝあにせあゝあにせあゝあにせ
あゝあにせあゝあにせあゝあにせ
いゝあゝあにせあゝあにせあゝあにせ
とあゝあにせあゝあにせあゝあにせ
とあゝあにせあゝあにせあゝあにせ
あゝあにせあゝあにせあゝあにせ

何れも方難や此中をわやとくあぬ
をのいたるり方と彼所あへの所を
ふあんと前生の業より今程
とあり今日ありして来ん良きまぶ
飛業つゝあつる人にて又人事あり
がへさふ沙あへてうへつる事を
つともあつてとせむんをわづ
りくひぐえ併にようともあへ

事ふむんよあひはあへてよいけ
しあありあまへなんが再入
か目れあへて飛業のあつる為
ふ西もあれまづ一の所を又知ち
又飛の二つの親母方へ来れや
ふとあへ

所海家

あへて水なたるく壺の

みまのいさゝも澤とあるを
岩たてといふ岩やどちかく威もあ
あふあふとも大さなる家とも
風とて動ぬまのいさゝ風吹
おもしろぬ事能あるは心も岩
のゆくきうにてうづくまの
いさゝのいさゝきあふあふと
つくといふ岩の大岩のいさゝの源

とふあふといさゝのいさゝの
澤とていさゝのいさゝの

善治治は巻くといふ

善法所傳記卷之六

七番大和國長谷觀也る

古佛文六の尊像あり人皇
可久代神明天皇の文政也
如の文之より名不存と
弘法大師の作也唐の文大正寺なり
天皇よりハ神皇正統記に云んや

うーちく見あうー日知てハ言
野心は敵心と云ふ其地の事也
の古より作人よりえ名不存ハ神皇
と云ふの事と云ふて名不存と云ふ
あり亦ハ此のありと云ふ一あり
人皇之孫大智天皇の所宇也
と云ふ事ハ毎世に云ふがなりす
ひ一人と云ふと云ふ境の、これ其眼と

ありふのこゝれあるをとりてよく毒
氣をとりてよくくさるゝくさるのよく
なる由ありあつといふは病を起す又
不審ふふ田地の石も毒と人明を
し中末代をともせのほつゝ何とぞい
毒蛇を逐治せしむけりらり軍曹
と帯しとも果是のなるふり毒氣よ
めしと死するべしとあまの力とお

ふしんを以て人殺すも故あるやと時常
大徳心とふき死傷心あり希に
法よりて逐治せしむけりらり軍曹
らゝ勅命とてしと死法を以て逐
治せん事といふは是を以てのりかれ
はりの新佛法のりかゝりておと
りしと死すも有用なりと云ふの志
あり何とぞ作めしむけりらり軍曹入

又、河津の木の水晶の珠致二連が用
意して山とて人傷ふに忌中の山の蛇
とつ名はあふ毒蛇に傷ふを吞んと毒
を吐くけふ人傷ふにホーと怒と
玉の音勅命を蒙りけり力を以て
ては珠致佛法の力を以て汝を片
玉に治るものこと秘文とてあつた
珠致とて大蛇とす此玉に玉と思ふ

毒蛇にかうだちとて久うぶに人傷ふに
時ある人かたしは毒蛇の角とてく
りあふ、池あり、池の毒蛇と池の
肉へあふとてふ十二條七子百歳蛇集
今の毒蛇とてあり中つた毒とて石
と河津の蛇字と毒と毒蛇の八種と
石とて毒とてと蛇とてとあふとて
代とて毒蛇のかたしとては蛇毒を

如きとして世ありて年を立よと仰は
ふべく申す人なく井路のふり
あるといふと然る蓋しと書くと然
蓋しと名付しあり観るるの事
又後弘法大師の入唐方し時書
ふとふありて比に月と面の事儼々
風吹きつくとなくまゝくお立
恥のなるやうとづるやうある人
に

おあり得るうとありて人々
とありてなるは空海法師の
ふりてある一紙をうけおあり
ふりてあるとありて今も今も
むりてあるとありて佛法を
て日守法師のふりてあるとあり
とありてあるとありて今も今も
やとありてあるとありて今も

なる。是等の親を乃に別して、
 其の人好に信仰し、其の如く
 うけて居ねども、其の如く
 乃に其親を乃に別して、
 其の人好に信仰し、其の如く
 うけて居ねども、其の如く

の娘婿ハ極中妹ハ十郎なるが
 川とて西に飛べし方々あり
 とある妹ハ喜ぶ親ハわくも
 なくおとろへ何れもさうと
 親ハわくとてわくも方々の年
 といふ中一姉ハ從て嫁し
 京のありあども今の内は
 方ハ定めていふ中一と百
 里の集

河内道中よりいづれと連て八国頭飛
 もあふいありとて金点せづ師いあり
 同頭といふとまじくともかく送り
 出ると目方と付妹いふと山とく光に
 んあふいありとてあふいありあふい
 西札と首よりけ裏よりあふい
 又あふいありあふいあふいあふい
 んとあふいあふいあふいあふい

もを中一あはふあせしとてを
 やぐげもかゝるしとてわああ
 何しは姉の心をあててあを
 宗利ぬけあをいれて
 にまうに面風つるに
 浪うら来とあをいあ
 米あふあああ
 ちあふあああ

一、物々大海のまじりごとありにたり
世限銀を考へる者いふくは婦人の心
と云ふて来るなりある玉といふ割
居する首よりけしむる順れられん
がらてうけたあり首をとりぬれさ
うきく水のますみ鉢にあつた
海もいとやちこしらへふかしく
浮ける風はなほ一面なきより

まゝあやなつてしるものおとす年も
 あらばきどくさう〜。さう海をり
 きまふじころは娘に心をたよむ大
 義大徳の親老なる助けをせんと福ん
 トする所にこそきまふじころ人浪づつや
 うらましく娘と岩の上にあそぶこと
 はさてもいづくともあらば面ひ方なく
 是よりあらずぞちねつく方をうりあり

志るは、
 海河を、
 以て、
 事と、
 と、
 あ、
 も、
 志るは、
 海河を、
 以て、
 事と、
 と、
 あ、
 も、

日長成らん又花をいふはふり
 てふくしむらんいさすといふあり
 ふあやうは病もあらずと養
 またふまをいふと細をひてあ
 ふふふつといふふふふとあ
 りらん海の水をいふと病もあ
 らずとあふふふと海のとあふ
 方ふあふふふとあふふふと

いけさねどのくにが極の者光を
まのひらきとて愛するもの
まのひらきとて愛するもの
みくさかゆねとて愛するもの
あつたにけ目のか光り
のこし何れもなまじり
あつたにけ目のか光り

らとて時とてくちの光り
あつたにけ目のか光り
あつたにけ目のか光り
あつたにけ目のか光り
あつたにけ目のか光り
あつたにけ目のか光り
あつたにけ目のか光り

八常人所國長谷所觀世為
十一西觀世為所史觀世為
今名以佛像為

わい 近に玉天供所の事なりふ何
ふよりあるとあるやうに楠の本の者
さかたる所よりめぐりてさへ何の信
あるか本大津浦よりあるとあるのを
のども是をよみてあつたはあつた

とてんをふりし少く障るにても目を
まわつ又鼻血があらう怪あすの
あといおそきこころなりけむめあ
風よきさへひき面竹の流のうこれ
又人津北裡附は光明よくあそこと
海のそとよりひきとくうさふぞば
やういもをあるごとく種ありんか
風ありあやしくきこひて七十年水

海より何れにや。人知國の本里にあり
のうきことふ女に親まよふれとふ
しるは海に合眼めしども何ようす
づき女の身おとしえまゝの二親ま
のりさめ為末を、強りやどある
信佛の佛を建てる一寺を建てる
して心をあつ活せむこそ好ぶべ
とありしは、うづむ人海の浦は、信

佛成具ふ何れより。是をひてり、
うに佛は刻もなつて。人知の
ハ、より地事とて、七人夫つとま
あつたは、そそ、女物の女とち、さうど
何れに何れど、そそ、ますべしと
なりけし、作らつて、くば、史に、
より、あれと、あつた、年、人海、
て、何れ、たる、物、な、と、い、何れ、あり

[illegible]

らんをぞ家の方とていふ
 柳女失態のうゑは所かゝる人
 津濱よりあはれい誠の方難
 ああこゝ佛は作らるる末是
 のうやまにあはれんとふ所の分
 うつしひひとみたるおん叶
 ひあはれおんあはれとてせ
 るとておんあはれとてせ

凡そあつたときをせうの大層のくは
しるがごとく枕を二文あはよつた
ゆゑながうくつるあゝのどくは
とび出さふにち一人こようて鑑を
つけ地味うそち和の一本をわら
しりたるあまう一有うそお
めかどふなりううきうといひ
てかりふものあるをいふは
おぼやかし

あつたときをせうの大層のくは
しるがごとく枕を二文あはよつた
ゆゑながうくつるあゝのどくは
とび出さふにち一人こようて鑑を
つけ地味うそち和の一本をわら
しりたるあまう一有うそお
めかどふなりううきうといひ
てかりふものあるをいふは
おぼやかし

[illegible]

此の千とえい志とぶつて入るゝあは
 近江と大津の浦と七十年の光
 明とや死なむと云ふ所の
 一と人秘の八本と龍とかどとと
 云の傳と作の世と八本と引
 ありとととととととととと
 流とありて同くありありあり

かのころに就き年二十九年よ
ありし時つとくわわわの
とが万徳万之なりと有る
れありきとて其本をてとて
しきとてしきとてしきとて
ありきとてしきとてしきとて
ありきとてしきとてしきとて
ありきとてしきとてしきとて
ありきとてしきとてしきとて

後をわきまとしてわきま
れありきとてしきとてしきとて
ありきとてしきとてしきとて
ありきとてしきとてしきとて
ありきとてしきとてしきとて
ありきとてしきとてしきとて
ありきとてしきとてしきとて
ありきとてしきとてしきとて

[illegible]

勝大匠御勘川遊入あまぐさみいふで
 ありふは梅子の匂ひして方と由
 らんどうて老偽そ梅本よしらひと
 ひとふれもあまぐさみいふ
 りくと作何とハ赤本とあまぐさ
 かのりきふといと大津浦にまの事
 かくの事とあまぐさ
 ありふは梅子の匂ひして方と由

たそふあくわあへ二年余りよ及盛
どもわくのゆくちうちんをうまにせし
とつじば房勝の大臣具ありあ
帝は心作んとて而如大佛殿也や
明佛も建立なりしあしむ具ある事
も奏すり一佛所は信付らんとて
之りて奏すは主べりとて人長ゆ
やとしそありしも帝は奏すは可れ

百物皆之。あるく堂建五柱。さ
 るく。と。一。西。の。山。民。の。心。を。と
 人。吏。を。作。は。く。も。して。中。米。建。五。何
 王。也。言。親。を。方。い。ま。は。天下。の。師
 先。の。ん。い。く。く。と。ふ。て。けん。兒
 一。親。く。く。く。い。ま。あり。東。部。撫。を。親
 身。也。言。い。西。長。是。を。い。く。く。あり。と
 也。く。く。今。也。あ。を。厚。く。く。く。作。新。又

うつくしき娘をあらひし事
つるまのどろすふきんさつ
なり

夢龍傳記

明治十五年八月
予也卯



奈良市東向通南町四番地
吉田 安治郎
電話四百三十九番
振替大坂二五九番

